

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2012年度 第 1 回 全統マーク模試問題

国 語 (200点 80分)

2012年 4 月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。

① 受験番号欄

受験票が発行されている場合のみ、必ず受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄、高校名欄、クラス・出席番号欄

氏名・フリガナ、高校名・フリガナ及びクラス・出席番号を記入しなさい。

- 2 この問題冊子は、46ページあります。なお、問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾

国

語

(
解答
番号
)

1

}

36

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

「テーマ批評」の創始者にして完成者、というよりむしろ結局はその唯一の成功した実践者と呼ぶべきジャン・ピエール・リシャールは、「堅固さ」への執着という観点からブルーストの巨大な文学宇宙を構成するありとあらゆる単語に慎重に目を留め、その一つ一つの意味の重さと発展性を秤量しながら、またそれらの配置と組合せが作り出す重層化された意味作用の深まりに鋭敏に反応しながら読んでゆく。そのとき「読むこと」は、作品とリシャールという一個体の意識と身体の全体との、壮大にして繊細な共振のドラマと化す。そのドラマは感動的で美しい。実際、批評作品としての『ブルーストと感覚的世界』の美しさは、比較の尺度などむしろ存在しないものの『失われた時を求めて』それ自体の美しさにさえおさおさ引けを取るものではないと断定してもよい。いつとき流行した「テーマ批評」の多くの模倣者や追隨者が一人としてリシャールほどの成果を上げられずに終ったのは単純な理由によるもので、結局、彼らのうちにこうした共振の劇をなまなましく演じうるほどの卓抜な意識と特権的な身体的所有者が誰もいなかったからでしかない。

A 今日、文学テキストのデータベース化は、一見、「テーマ批評」の実践を一挙に容易にしたかに見える。事実、ウェブ上で容易にアクセスできる『失われた時を求めて』全文のサイトで、たとえば constant なら constant という単語を検索すれば、大長篇の全篇中この形容詞の男性単数形の使われている全十四箇所が、コンピュータのモニター画面上にたちどころに出現する。「水」なら「水」で検索を掛ければたちまち入手できる一覧表を素材として、「ブルーストにおける水のテーマ系」などという紀要論文があつと言う間にでつち上げられるというものではないか。リシャールがやつたに違いない、第一行から最終行まで緩慢に精密に読み進め、記憶を頼りに後戻りしたり一挙に前に飛んだりしながら何度も何度も再読を重ね、意識に引つ掛かつてきた箇所^{ふせん}に付箋^はを貼ったりその原文をカードに書き写したりしてゆくという非能率的で不確実で、遺漏^{いろう}も写し間違ひも多かるう原始的な手仕事と比べて、これはまた何とスマートなやりかたであることか。

だが、このスマートさに依拠してヨウ^(ア)リョウ^(ウ)良く書かれた研究論文があるとして、その中でリシャールに及びうるものなど

一篇たりともないと断言できる。なぜか。そこには「読むこと」が欠落しているからである。

情報メディア社会の到来などと言われるが、**B** この「メディア」という言葉は改めて考えてみればいかにも奇妙なものだ。情報メディア社会のめざす知的環境の理想は、むしろ媒介性の消去、すなわち即時性だからである。言説もイメージも手際良くパッケージ化され、分類され、インデックス化され、或る情報断片が請求される瞬間とそれが獲得される瞬間との間のタイム・ラグの最小化をめざす努力は日々とどまるところがない。コミュニケーションにおいて発信者と受信者とを無媒介的に即座に繋ぎたいというのが情報資本主義の究極の欲望なのだ。メディア時代などと言われながら、「媒介」は日に日に虚構化の一途を辿るばかりだ。実際、人々は今や「媒介」のまだるっこしさに耐えられない。『失われた時を求めて』の「私」がヴェネツィア滞在中、落馬事故で死んだと聞いていたかつての恋人アルベルチヌからの電報を受け取って喫驚し、しかし数時間後に、それが郵便局員の過誤によって書きつけられた偽の署名で、電報は実はジルベルトからのものであったことにはたと気づくというあの驚くべき挿話など、今日読めば、当時のメディア環境のこの牧歌的な、ろさが人々を啞然とさせずにはいない。

こうした状況が結果として招来したのは、「読むこと」の失権である。解釈すること、分析すること、コメントすること、そんなことなら今なお活発に、いやひょっとしたらかつてないほど旺盛に行なわれている。

しかし、もっとも素朴な行為であるはずの読むこととなると、さあどうなのか。文字の連なりを辿ってその意味作用を意識のうちに現勢化する——あまりに自明すぎて、そんなことは識字能力さえあれば誰でも出来る日常的な瑣事と高を括られすぎではないか。人文科学の分野においてさえ、それが運ぶメッセージが伝達しおこせられるやたちまち無用のものと化すといった「情報」ばかりが行き交い、その効率的な処理技法の洗練にのみ人々がセンシンしているかに見える今、もっとも貶められないが、蔑ろにされている行為こそ、**C** 「読むこと」というこのプリミティブな手仕事なのではないか。

むろんリチャールも見事に解釈し、深く分析し、鮮やかにコメントしている。しかし、彼の著作の本当の凄みは解釈にも分析にもコメントにもない。彼の試みの核心は、比類のない「読むこと」の実践にある。記号の群れがいつせいに立ち騒ぐ「意味のアンナキー」のただなかに裸身で **X** じりじりと分け入って、数多の触手を四方八方に **Y** じわじわと伸ばしながら、テキスト上を

なめずるように這い進んでゆく意識Ⅱ身体の運動の、絶えず文化と野生の境界を攪乱しつづけるあの異常な活力にある。速さと遅さを無秩序に混淆させたその運動がまとう、人間性の閾を超えほとんど動物的と言ってもいいようなあの迫力にある。

「読むこと」の威信低下、ないしそれが今日不当に蒙っている軽視と侮蔑は、(7) タンテキに、それが「媒介」の営みにほかならないという事実に由来するように思う。「読むこと」とは、テキストとその読者の意識Ⅱ身体との間に介在し、両者を結びつけてつづ、同時にその結合の関係性をありとあらゆる仕方で複雑化し、複雑化することによって豊饒化する不透明な「媒介」の時空にほかならない。「媒介」性を逆説的にも倦厭しその虚構化を欲望する情報メディア時代は、こうした不透明な「媒介」に生の豊饒化の契機を見ず、それを単にかつたる迂回、濁った夾雑物としか捉えない。読むだけはもう一応読んだことにして、むしろそれから後、自分が舞台の前景にしゃしゃり出て行なう個性的な解釈、個性的な分析、個性的なコメントの独創で、Z 観衆を睥睨させてやろうというわけだ。だが、「読む」という行為の分厚い不透明な厚みを曖昧に虚構化したまま性急に解釈し分析しコメントしようとする人文学的思考は、「情報」の集積に還元されたギ(エ)ジ的「学知」の浅薄さに汚染され、とめどなく貧困化していかざるをえない。

「読むこと」が、すなわちテキストとそれに対峙する主体の意識Ⅱ身体との間の「媒介」が、今、復権されなければならない。近代日本の所有した真に優れた人文学の業績はどれもそのあらゆるページに、「読む」という行為の分厚い不透明な厚みのただなかに意識Ⅱ身体が滞留しつづけ、じりじりと緩慢にそれを潜り抜けていった長い長い耐忍の時間の記憶の影をとどめている。解釈も分析もコメントもその記憶の影に支えられて初めて真に「生きた思考」たりうるのであり、その「媒介」の時空の記憶こそが人文学の倫理であるという事実を、それら畏怖すべき著作群は無言のうちに教えているのだ。

すべてをとめどなく無Ⅱ媒介化しようとする情報資本主義に逆らって、不透明にして迂遠な「媒介」の時空を回復しなければならぬ。なぜなら「媒介」とは変容の導入だからである。「読む」とは、単にテキストの正確な認識、すなわち主体の意識へのその等身大の転写であるにとどまらない。むしろテキストをあるがまま正確に認識することがすでにそれだけで大変な労苦を要求する作業であることは言うまでもない。だが、「読むこと」がその地点で停止するというのはあまりにも貧しいレクチャー(注6)

ル観であろう。「媒介」されることによって対象は確実に変容するのであり、逆に言えば、いかなる視線の網を潜り抜けようとすることによってテキストに何らかの変容が導入されないかぎり、そのテキストは真に読まれたとは言えないのだ。

独創性を標榜する解釈や分析やコメントで見栄え良く飾り立てられることがテキストの変容なのではない。「読むこと」こそ

がテキストを変容させる。主体の意識＝身体の働きかけを通じて、一つの単語、一つの文の意味作用が垂直次元で深化し、単純と見たものがカオティックに流動化し、瑣末と見た細部同士が不意に共鳴し合い、意味が乗乗化し形式が豊饒化するとき、

——そのとき初めて「読むこと」という「媒介」はその真の潜勢力を発揮したことになる。人文学の目的とは、単に対象を理解し認識することに尽きるのか。究極的にはそれは、理解と認識を通じて対象を変容させることをめざすのではないだろうか。

今日、生産的な「媒介」の时空の虚構化は、文学創造の現場そのものさえ汚染しているかに見える。新人賞を受賞した若い作家を、そのカリチュア化された「イメージ」の商品化によって売ろうとする出版社の下卑たマーケット戦略は、長期的には結局、文学を痩せ細らせてゆくだけである。出来合いの「イメージ」という悪しき「媒介」は、D

テキストを現実「読むこと」という生産的な「媒介」を阻害するだけだ。新人作家はデビュー早々、商品化された自己の「イメージ」と闘うところから始めなければならぬが、そうしたつまらぬ責務を負わされることがカイ(カ)しかけた才能のそう遠くない枯死に繋がらないとい

たい誰に言えるのか。

(松浦寿輝「媒介の倫理」による)

(注)

- 1 ジャン＝ピエール・リシャール——フランスの批評家（一九二二）。『ブルーストと感覚的世界』は彼の著作である。
- 2 ブルースト——フランスの小説家（一八七一—一九二二）。長編小説『失われた時を求めて』で知られ、二〇世紀を代表する小説家とされる。
- 3 秤量——秤^{はかり}にかけて目方をはかること。「しよりよう」または「ひよりよう」と読む。
- 4 ウェツブ上——インターネット上。
- 5 タイム・ラグ——時間差。時間のずれ。
- 6 レクチュール——読むこと。読書。
- 7 カオティック——混沌^{こんとん}とした。無秩序。
- 8 冪乗化——累乗化。
- 9 カリカチュア——戯画。人物や物事をおもしろおかしく誇張して描いた絵。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

(ア)

ヨウリヨウ

①

- ⑤ 苦楽をともしたドウリヨウ
④ リヨウシュウ書を受け取る
③ キュウリヨウ地帯に入る
② リヨウキンを支払う
① ドリヨウが大きい人

(ウ)

タンテキ

③

- ⑤ タンシヨを改める
④ タンチョウな生活
③ シンタンを寒からしめる
② イタン視される
① 陰謀にカタンする

(オ)

カイカ

⑤

- ⑤ 物語がカキヨウに入ってくる
④ 懸案事項にカヒの判断を下す
③ 競争が次第にゲキカしていく
② カンカできない事態が生じる
① 慰霊のためにケンカする

(エ)

ギジ

④

- ⑤ ルイジ点に着目する
④ ジイを表明する
③ 全集がチクジ刊行される
② ゾクジに入りやすい主張
① 権力をコジする

(イ)

センシン

②

- ⑤ 読書にチンセンする
④ ゲンセンされた素材
③ 知識のゲンセン
② 君主がセンオウを極める
① センケンの明がある

問2

傍線部A「今日、文学テキストのデータベース化は、一見、『テーマ批評』の実践を一挙に容易にしたかに見える」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① コンピュータ技術が発達し、文学作品に対する多様なアプローチが可能になったことで、価値あるものに見えたテーマ批評という手法もいつときの流行でしかなかったということが、あらわになってしまったから。
- ② コンピュータを使い文学作品を情報としてとらえるという新たな技術が可能になったことで、かつてのテーマ批評にも比肩する新たな文学研究を、きわめて能率的に行えるような環境が実現したから。
- ③ 情報技術の発達により、文学作品が検索可能な情報の集合体になってしまったことで、精緻な読みにもとづいているとも受け取れるような作品研究が、かつてとは比較にならないほど手軽に行えるようになったから。
- ④ 文学研究に新たな情報技術が導入されたことで、人間が一つ一つ字句をたどるという非能率的な手法だけでなく、一挙に後戻りしたり前に飛んだりしながら再読するといった手法までもが可能になったから。
- ⑤ 情報処理をめぐる技術の進展によって、発信者と受信者とを無媒介的に繋ぐものだったはずのメディアというものが虚構化してしまい、そうしたあり方が文学研究のなかにも入りこんでくるようになったから。

問3

傍線部B「この『メディア』という言葉は改めて考えてみればいかにも奇妙なものだ」とあるが、なぜ「奇妙なものだ」と言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① 情報メディア社会における理想的な知的環境とは、メディアによる媒介行為ができるかぎり即時的に行われるようになった状態だと考えられるが、今日では、メディア社会などと言われながらも、そうした理想的な状況とは対照的に、媒介性が虚構化の一途を辿るようになってしまったから。

② メディアとは、情報を可能なかぎり即時的かつ手際よいかたちで獲得するための手段であるべきだが、今日の情報メディア社会においては、それが対象を正確に分析し理解するという行為を能率的に行うための単なる手段と化してしまい、結果的に知的環境の退廃をもたらしているから。

③ メディアとは、身体的存在である人間と対象との間を媒介する不透明なものであり、その媒介性は、両者の関係を複雑なものにすることで生の豊かさをもたらしめるが、今日では、情報メディア社会ということが標榜されているにもかかわらず、その媒介性をできるかぎり希薄にしようことがめざされているから。

④ そもそもメディアとは、人間が環境のなかで生きていく際にその環境と人間との間を媒介するものとして生まれたものであり、だからこそその環境が複雑化すればするほどメディアに依拠せざるをえないが、今日の情報メディア社会では、逆にそうした媒介性が消去されるという方向性が生じつつあるから。

⑤ メディアとは、人間と対象とを媒介し、その両者の間の関係に複雑さや豊饒さを与えてくれるものだが、今日では、情報メディア社会の到来と言われながら、メディアのもつそうした媒介性が消去されつつあり、そのことでかえって直接的で身体的な行為の復権が求められるという奇妙な結果が生じているから。

問4

傍線部C「『読むこと』というこのプリミティブな手仕事」とあるが、それについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

① ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 独創的な解釈や分析をよしとする風潮に迎合することなく作品の再読を重ね、意識に引っ掛かった箇所では立ち止まり慎重に吟味するといったことを繰り返し、そうした行為を通じて作者が作品に込めた意味を読み取っていく。
- ② 作品の第一行目から最後までをひたすら緩慢に読み進めるなかで、気になった箇所に付箋を貼ったり自らの手で書き写したりしながら、文章理解の精度をあげることを実現し、作品の正確な理解を心がけようとする。
- ③ 卓抜した意識と特権的な身体をもって作品と対峙するが、その際、作品の欠点をあげつらうことをせず、隠された美点を明らかにすることで、受動的な読み手であることから脱し、作者と同等の立場に立つことを実現する。
- ④ 作品世界にじりじりと分け入り、人間の領域を超えた動物的な野生の感覚を駆使することによって作品の意味を解体するが、それにとどまらずたく新しい意味を作品に付与することで、作品の再生をはかっている。
- ⑤ 作品をただ読み急ぐのではなく、記憶を頼りに自在に行きつ戻りつしながら精密に読み進め、気になった箇所は書き写すなどして、手間もかかり正確さも期待できない行為を辛抱強く続け、最終的に作品の姿を変えていくとする。

問5

傍線部D「テキストを現実には『読むこと』という生産的な『媒介』を阻害する」とあるが、それについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 理解と認識を通じて対象の変容をめざすという人文学の手法と、イメージの商品化によって出版物を売ろうとする商業主義の手法とが混同された結果、すでに痩せ細った文学しか存在しえなくなっている。
- ② 従来は読み手が行っていた生産的な媒介という行為を、出版社などが代替して行うようになってしまったせいで、読み手が作品を読んだり分析したりすることを怠るという傾向が助長されている。
- ③ 文学作品やその作者についてのわかりやすいイメージを提示することで作品を売ろうとする商業戦略の拡大によって、個々の読み手が主体的に作品に向き合うというあり方が、ますます失われつつある。
- ④ 作者のイメージを商品化することによって作品を売ろうとする悪しき手法が世に蔓延まんえんしており、そのことによって、どの作家も捏造ねつぞうされたイメージに合わせて作品を創造せざるをえなくなっている。
- ⑤ 都合の良いイメージにのせて出版物を売ろうとするマーケット戦略によって、文学作品を生み出す作者の才能が枯死する可能性が生じ、文学批評という行為さえもほとんど行われなくなろうとしている。

問6 この文章の表現について、次の(i)・(ii)の各問いに答えよ。

(i) 波線部 **X・Y** の表現効果を説明するものとして最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 読むという行為の醍醐味は、異様な迫力を感じさせるほどの卓越した集中力と持続力を通じてこそもたらされるところを、生々しく印象づけるという効果がある。
- ② 文学作品を明快に解釈し、わかりやすく分析しようとするリシャルのテーマ批評が、異常なまでの活力を潜在させているということを、強調するという効果がある。
- ③ 文学批評とはきわめて素朴な行為であり、それはゆつくりと時間をかけてしか進歩しえないものだということを、巧みな表現によって示唆するという効果がある。
- ④ 誰もができる瑣事だと見なされがちな読むという行為が、実は動物的ともいえるほどの豊かな感性の持ち主にしかなしえない行為だということを、さりげなく示すという効果がある。

(ii) 波線部 **Z** の表現についての説明として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 従来 of 作品解釈とは違つた個性的な読みを提示することて読み手を困惑させようとする現代の批評家のあり方を、あくの強い舞台俳優の演技に喩えて表現している。
- ② 自分にしかできない個性的な解釈によつて読み手を啓蒙しようとする現代の批評家の姿を、強引に芝居を統制しようとする舞台俳優の姿と重ね合わせて表現している。
- ③ 読むことの媒介性を虚構化しようとする意図にもとづいて活動する現代の批評家の浅薄さを、やはり浅薄な演技しかできない舞台俳優の姿を借りて表現している。
- ④ 独創性を標榜する安易な分析コメントなどで読み手を感じさせようとする現代の批評家の態度を、目立ちたがる舞台俳優になぞらえて表現している。

第2問

次の文章は、加賀乙彦（かおとひこ）の小説「異郷」の一節である。自ら志願して少年兵となった「彼」は、敗戦を機に郷里に帰ってきた。父からの知らせでは、罹災（りさい）を免れた家には今は父しかおらず、母と弟はまだ疎開先にとどまっているらしい。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文上の数字は行数を示す。（配点 50）

彼はひとりになった。（注1）一緒に復員した少年兵たちと別れ、ひとりで歩いていた。S駅は破壊され、プラット・ホームと階段の骨組だけが残っていた。かつて天井に明り窓のあった地下道は、天井が崩れ落ち、塹壕（注2）の底を辿る趣きがあった。足先は絶えずセメント塊や鉄骨にさまたげられ極度に歩きづらかった。

5 さして大きからず、従って重くはない背囊（注3）が次第に背中にのしかかってきた。中には冬の軍服一着と外套（がいとう）と靴下入りの米二升と仏和辞典と未使用の大学ノート五冊が入っていた。そのうち米が最も重要なものに思われた。米だけは何としても家まで持帰りたかった。

駅前には灰色の世界がひろがっていた。数々の焼跡を見てきた目にもそれは異様なものに映った。幼少の頃から親しんできた繁華街がそっくり消え去って、歩き慣れた道が、道だけが、何だかいやに無傷で続いていた。

歩道にはかなりの数の人々が歩いていた。誰も彼もが光の重圧に押えつけられたように前かがみになり、ゆっくりと自分の影を踏んでいた。彼のような復員兵士も混っていた。彼は人々の流れに入って進んだ。行き交う人々は無表情であった。人々は目鼻立を拭い取られたコケシのように顔の無いつるつとした前を見せていた。

角の百貨店に来了。百貨店は焼けていず、明るい電燈がつき品物を積みあげたなかで紺の制服の店員が立働いていた。A焼跡と無関係にそんな光景があるのが許し難いように思われた。斜めに店内を横切ったほうが道が近いという理由で彼はなかに入った。

15 以前慰問袋を並べたところが鍋釜などの家庭用品売場となっていた。ひどい混雑に彼はあちこち小衝（こづ）き回された。紙幣をにぎって品物を争っていた女が、彼を邪魔にして露骨に不快な表情をした。この表情が彼がこの街の人々に見た最初の人間らしい反

応であつた。

大工道具売場に来てついに彼は動けなくなつた。金槌かなづちや鋸のこぎや釘くぎが、何か破滅が迫つてそれが緊急に必要なだというように売れてゐた。彼は群衆にはさまれ、荷物の重みと暑さに耐えきれぬ思いをしながら、しかし、店内に入つたことを後悔はしていなかつた。

彼は既定方針どおり先へ先へと強引に進んだ。進む権利が自分にあると信じた。わざと人にぶつかることもしながら店の外へと通り抜けた。

再び異様な世界が続いていた。

教材用の地形図のように地形が剥むき出しになつてゐた。駅を中心とする繁華街は丘の上にあり、今彼が行こうとする家は丘を下り、次の丘の中腹にあつた。

彼はわが家のあるあたりに濃い緑が盛上り家々の瓦かわらが嘘うそのように光っているのを認めた。家が焼け残つたことは父からの音信で知つてゐた。が、今、こうしてわが家の無事を見て熱い感動を覚えた。この感動が利己的な感情であり、さつき百貨店を見て許しがたいと思つたことと矛盾していることに彼はかすかに気がついてゐた。家のまん前に立つた時、彼が覚えたのは喜びよりも後めたさであつた。

30 石段を駈かけあがり、門をくぐつた。玄関も二階の窓も唐楓とうかえでの大木もすべて前のままであつた。蟬せみが鳴きしきつてゐた。梢こずえと軒のきに縁取られた青空は和んだ現実的な色を取戻した。

(注5) 玄関の櫺子戸れんじに鍵はかかつていず、中に入つた彼は荷物をおろして脚絆(注6) きやはんを脱ぎはじめた。

「誰」と声がした。父の声であつた。彼は名乗つた。今日は金曜日だから父は出社しているものと思つてゐた彼は父が在宅してゐたことに驚いた。

35 「やあ、無事帰つてきたな」

父が顔を出した。端の綻ほころびた半ズボンに上半身は裸で首に手拭てぬぐいを巻いてゐた。父特有の焦げたような汗においの臭がした。全身が水

をかぶったように汗みずくであった。

「汽車はどうだった」

「復員列車だよ。超満員だった」

40 「大層な荷物だな」

父は太った小豚のように脹れあがった背囊を撫でた。

「米がある。二升だ」

「それは有難い。さすがは軍隊だ」

父は嬉しげに言った。その二升を大切に持ってきたくせに彼はそんなことで喜ぶ父をちよつと憐れに思った。

45 「会社は休みなの」

「ああ、昨日は宿直だったからな。けさ帰ったところだ」父は彼をしげしげと見て、「まあよかった」と言った。

「何が」

「何がって、お前が生きて帰れたことがさ。いや、おたがい、生きて帰れてよかった」

「でも……」彼は内側に脹れ上った怒りを押えて、むっと黙り込んだ。国の敗戦を喜ぶような父の口調に、^(ア) 癪が触ったが、なぜ

50 かそんなことを父に言うのが気恥ずかしかったのである。

「いま、裏でな、昔の井戸が使えるかどうか研究してたんだ。さいわい井戸水はきれいなんだが問題はポンプだな。すっかり毀れちゃっている。釣瓶にするか滑車にするかだ。お前も手伝ってくれよ。何しろ水道が当てにならなくてな。いまもな、昨日から断水ときてる」

「ああ、咽喉が渴いた」

55 「水なら薬罐のなかだ」

台所の流しに煤けた薬罐があった。水は生暖かく、妙な臭がした。かなり古い水らしかった。流しのトタン板は錆び、調理台

の端は白い埃をかぶっていた。男一人暮しのなげやりな感じがあって、父を気の毒に思った。

水を浴びようと風呂場をのぞいたところ五右衛門風呂の釜がなく、かわりにコンクリート製の防火用水槽が置いてあった。戦争の終るひとつきほど前、釜を献納したという父の便りが来たことを思い出した。水槽に少し水があったので汲もうとして汚れた洗濯物が漬けてあるのに気付いた。B 苦笑して座敷に戻ると父は裏へ去っていた。

汗くさい体を不快に思いながら腰をおろした。今朝からずつと立ちづめ歩きづめで腰から脚にかけての筋肉が軋むように痛んだ。少し眠ろうと目を閉じた。風が立って埃っぽい日なたの臭を運んできた。一匹の蟬が鳴きやんだ。何かの落ちるかすかな音がした。蟬が死んだのかしらんと思ううち彼は眠りに落ちていった。

夕方、彼は門前に立った。

65 街が無かった。あるべき筈の街を失った地面に、薄皮のような斜陽が這っていた。

棘がある、刃物がある。それは焼け木立であり、ねじくれたトタン板であり、破壊されたコンクリートであり、裸の煙突である。そこには乾いた、不毛の、死滅した空間があった。

廃墟にも夏草は茂り、焼け木立の枝に緑の葉のつくこと、そこに壕舎がつくられ、竈の煙が昇り、人々の生活がいとまれて
いることは認めねばならぬ。が、だからといってあるべき筈の街が無いことに変わりはない。彼の視線は棘々しい光景に
倦んだ。

70 道の中央に出てみた。車の往来の絶えた広い舗装道路はなめらかな起伏を繰り返しながら南から北へと走っていた。南の丘の上には百貨店の、それだけは戦前と変らぬ八階建てのビルが立ち、そのあたりに焼けのこった映画館や銀行のビルがかたまっていた。北は、異様な風景で、それを見た時彼は軽い眩暈を覚えた。道の左右に全く異なった様子があり、安定した視点を彼は持ちえなかったのである。

右側は廃墟である。が、左側はごく普通の家並であった。夕日が何のためらいもなく、緑の茂みと屋根瓦と窓と羽目板に睦んでいた。おのがむきむきの個性を持った家々が、視線の移ろいに和やかな諧調を返し、遠近法の法則に従っていた。

この左右の不均衡が彼に眩暈をおこさせたと思えた。が、それだけではなかった。古い和やかな家並に対して彼は後めたさを

覚え、それで気持が落着かないのであった。

中央に逆三角形に立つ道によって左右に分たれていた風景が、丁度陽画が陰画に、陰画が陽画に変わるようにそっくり左右が入れ代った。そのような気がした。こういうことだ。右にあるべき筈のものが無いのではなく、右の廃墟こそ常態であって、左の家々こそ異常なのである。言ってみれば、左にこそ無い筈の家々があるのであった。

つい二週間前、彼は少年兵として死を覚悟していた。秋に米軍が九十九里浜に上陸することが想定され、決死隊となって敵戦車を攻撃する訓練に従っていた。敵戦車には必ず監視の行きとどかぬ死角がある。この死角に向って匍匐前進し、フラスコにガソリンをつめた火焰瓶を戦車の窓から投げこむのであった。しかし敵戦車の死角はたえず移動するであろうから、五人が一時に攻撃を開始し、そのうちの一人が成功すれば可なりという計画で玉砕は既定の帰結であった。

85 八月十五日、敗戦によって決死隊の可能性が消えた時、彼は自分が生きのびる未来という時間を何度も想像した。白い陽光のなかで彼の未来はただ白く空しく想像されるだけであつた。そこにはかすかな喜びがあつたけれども悲しみの念のほうが強くあつた。

無意味に生きるよりは、国のために命を捧げたい、何の(つ)てらいもなく彼はそう思っていた。そう思っていると信じていた。彼は四人の同志とともに自決の相談をした。戦争に敗けたのは軍隊の力が至らぬからであると同は思った。銃剣は切腹には鈍器でありすぎるというので将校用の軍刀を入手すべく計画を練った。この計画は、軍刀も入手できぬままに時が経ち、ついに消えてしまった。

今、生き残った喜びと後めたさが彼のうちで闘ぎ合った。その気持は道の左右の異質な風景に不安定な翳を与え彼は軽い眩暈を抑えることができなかったのである。

彼は家へ戻った。D 自分の家が妙に居心地が悪く思えた。

(注)

- 1 復員——召集を解かれた兵士が帰郷すること。
- 2 塹壕——野戦で敵の攻撃から身を隠すために掘られた溝みぞや穴のこと。
- 3 背囊——軍人が物品を入れて背に負うかばん。
- 4 慰問袋——出征兵士を慰めるため、娯楽物・日用品などを入れて送る袋。
- 5 櫺子戸——細い木や竹などを縦横に組んで取り付けた戸。格子戸。
- 6 脚絆——歩きやすいように、すねに巻きつける細長い布。ゲートル。
- 7 五右衛門風呂——かまどの上に鉄製の湯ぶねを据えて焚たく方式の風呂。
- 8 諧調——調和の取れたさま。ハーモニー。
- 9 匍匐前進——腹ばいになって進むこと。
- 10 玉碎——名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一

つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア)

癩が触った

12

- ① 神経質な性分になった
- ② 気にくわぬものを感じた
- ③ 疑問を感じた
- ④ 不平を言いたくなくなった
- ⑤ 敏感になった

(イ)

倦んだ

13

- ① 退屈した
- ② 苛^{いらだ}立った
- ③ 厭^{いや}になった
- ④ 疑心暗鬼になった
- ⑤ 混乱した

(ウ)

てらい

14

- ① 誇り
- ② 取り繕い
- ③ 憤り
- ④ 気取り
- ⑤ 恥じらい

問2

傍線部A「焼跡と無関係にそんな光景があるのが許し難いように思われた」とあるが、「彼」がこのように思ったのはどうしてか、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 家庭用品や大工道具が飛ぶように売れている状況は、米と最低限の品物しか持っていない「彼」にとって、直視がたい不愉快なものに感じられたから。
- ② 自分の心中とは対照的な明るい光景が行く手を阻んでいる様子を見て、くたびれはてた復員兵士である「彼」は不愉快な思いを禁じえなかったから。
- ③ 焼跡の非情な風景とは関係ないかのように繰り広げられている、人間的な温^{ぬく}もりのある光景を見て、「彼」は割りきれないものを感じてしまったから。
- ④ 悲惨な状況を気にもせず「彼」を邪魔にして不快な表情を向けてくる者に、非人間的な態度を感じてしまい、思わず憤りを覚えてしまったから。
- ⑤ 復興に駆り立てられている人々のひしめき合っている店内は、焼跡の風景とは対照的で、「彼」の神経を逆撫^{さか}撫^なでするものだったから。

問3

傍線部B「苦笑して座敷に戻ると父は裏へ去っていた」とあるが、「彼」の「父」に対する思いの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 家族の無事を優先する「父」に釈然としないものを感じていたが、そうした利己心が自分にもあることを自覚するにつれ、それまでの自分のあり方を「父」に対して申し訳なく思っている。
- ② 戦争が終わったことを喜ぶような「父」のものの言いには抵抗を感じながらも、慣れない家事をつづけながら敗戦後の生活を立て直そうとしている父の姿には、同情を禁じえないでいる。
- ③ 国の敗戦を喜ぶような「父」の発言には瞬間的な憤りを覚えたものの、誰はばかりことなく一人暮らしを愉しんでいるその様子に触れるにつれ、微笑^{ほほえ}ましさを感じるようになってもいる。
- ④ 自分一人で家を守ってきたことを誇ったりすることなく、むしろ逆に、一人暮らしの情けなさを隠すことなくさらけ出そうとする「父」のあり方に、人間的な親しみの情を感じている。
- ⑤ 戦争による惨禍から抜けだそうと身を粉にして働く「父」の後ろ姿を見て、息子として「父」を誇りに思う気持ちが高まり、戦争観の相違からくるわだかまりを払拭^{ふっしょく}しようとしている。

問4

傍線部C「そこにはかすかな喜びがあったけれども悲しみの念のほうが強くなった」とあるが、それについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 家族のことしか考えない父親へのあてつけのような気持ちで国のために死んでみせようかとも思っていたが、敗戦でそれが適わなくなり、自分に与えられたこれからの日々を父との確執のなかで生きていかざるをえないことに忸怩たる思いを噛みしめている。

② 敗戦によって決死隊の可能性が消えてしまったことは、無駄に命を捨てなくてもよくなったという点でたいそう喜ばしいことであるが、国家のために自己を犠牲にするという崇高な目的が見失われたことに関してはそこはかたない悲しみを感じている。

③ 不意に訪れた敗戦によってはずも生きのびてしまったことに、不快な思いばかりを覚えているわけではないが、自身の生を支えていた目的が失われ、これからの自分の姿がまったく見えてこなくなってしまったことに茫然とし、悲嘆に暮れるような気分になっている。

④ 国家に自らの命を託すという決断はいたずらに延命をはかろうとする生き方に意味などないという考えに裏打ちされたものであって、その決断が間違っていないかったことにはそれなりの喜びを感じたものの、そこまで思い詰めてしまう自分のあり方には淋しさを禁じえないでいる。

⑤ 敗戦によって家族と再会を果たせたのは喜ばしいことであるが、国家のために生きるといったこれまでの信念を苦もなく捨て去り、自分の未来のためだけにこれからの生き方を模索しようとする自らの態度を浅ましいものに感じ、後ろめたさと悲しさを覚えている。

問5

傍線部D「自分の家が妙に居心地が悪く思えた」とあるが、それについての説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 廃墟のなかから人々の生活が新しくはじまっていることには感動を受けたが、その一方で戦禍に遭わなかった自分の家が、そうした復興の営みと無縁であることに違和感を覚えていた。
- ② 生き残った自分が、焼け残った家で道を隔てた廃墟のことを思いやっていると、安堵感あんどとともにやましきのような気分を覚え、自分の家が非現実的なものであるかのようにすら感じられた。
- ③ 戦火に焼き尽くされた街のなかで偶然にも焼け残った自分の家が、おめおめと家に帰ってきた自分の姿を象徴しているように思え、そうしたことを考えてしまったことに後ろめたさを感じていた。
- ④ 廃墟と言うほかないような街並みがある一方で、自分の家のように戦前と変わらぬ平和な佇まいたたずまいを見せる一画もあるという、その奇妙な対照性に精神の平衡を乱されていた。
- ⑤ 敗戦後の混乱のなか、多くの人が生きる気力をもちえずにいることを考えれば、自分の家が無事だったことだけでも感謝しなければならぬと、不安定な気持ちのなかで自分に言い聞かせていた。

問6 この文章中の叙述に対する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わな

い。解答番号は 19・20。

- ① 10・11行目では、道を歩く人々を「目鼻立を拭い取られたコケシ」に見立てるといふ擬人法が用いられているが、この表現は、周囲の人々に距離を置こうとしている「彼」の内閉的な心情を示しているとも考えられる。
- ② 21行目には、百貨店のなかを「進む権利が自分にあると信じた」と考える「彼」についての描写があるが、これは「兵士」として苛烈^{かれつ}に生きてきた「彼」のあり方を戯画化したものだと言うことができる。
- ③ 27行目には、「わが家の無事を見て熱い感動」を覚える「彼」の姿が描かれており、これは、自分のことを対象化できない「彼」の、精神的な未熟さをそれとなく示すものになっている。
- ④ 66行目では、廃墟のさまを描くにあたつて「棘がある、刃物がある」といった硬質さを感じさせる表現が用いられているが、これは、廃墟の非情さを際立たせようとしたためだと考えられる。
- ⑤ 76行目の「左右の不均衡」、92行目の「道の左右の異質な風景」など、奇妙ともいえる廃墟の様子が繰り返し描かれることで、「彼」の精神が次第に非日常的で異常な世界へと入り込んでいくさまが象徴的に示されている。
- ⑥ 81行目の「つい二週間前、彼は少年兵として死を覚悟していた」で始まる回想場面が本文に挟み込まれているが、この場面は、現在の「彼」の心情を理解するうえで決定的な手がかりとなっている。

第3問

次の文章は、『岩屋の草子』の一節である。都で生まれ育った対の屋の姫君（姫君・対の屋）は、ある事情から明石の浦で漁師夫婦に養われていたが、西国から都へ戻る途中の中将に見初められ、中将とともに都に戻って、中将との間に二人の子をもうけた。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

過ぐる月日ほどなくて、若君七つ、姫君五つと申す八月十五日に、御袴着ありける。御袴着の親には、ちさうやういんの刑部卿の宮にておはしけり。^(注1) 一の人の袴着なれば、大臣・公卿・殿上人、皆々漏れず参り給ひけり。^(注2) 堀川の大納言も参り給ふ。その時、姫君、公達を膝の上に奉りて、涙を流して仰せられけるは、「刑部卿の宮の、御袴の腰結は^(注3) a せ給ひて後、御座より降りて、公卿の座にて八番目におはします帥の大納言を三度づつ拝ませ給ひて、茵に居給へ」と教へ奉り給へば、さて、公達、出で給へば、刑部卿の宮、御袴の腰結び参らせ給ひぬれば、御兄妹うち連れて公卿の前に降り給へば、皆々、膝を立てて直衣の袖をかき合はせてかしこまり給ふ。その時、二人の公達、帥の大納言殿を三度づつ拝みて、もとの御座へ居直り給ふ。大納言殿は、かしこまり給ひて礼せられ、冠の巾子を地につけて深く恐れ給ひけり。その時、祖父殿下、公達に問はせ給ふ。^(注4) 「何の故、公達は帥の大納言をば礼し給ふぞ」とのたまへば、「母御前の『拝み参らせよ』と仰せなり」とのたまへば、殿下、左近尉を召して、「御簾の前に参りて、^(注5) A 公達は何とて帥の大納言をば礼し給ふぞ」と尋ね申せ」と仰せられしかば、^(注6) B やがて参りて、この由を申せば、御簾の内に泣く声、公卿の座まで聞こえけり。さて、姫君、涙の隙より仰せありけること、左近尉は袖をかき合はせてうつ伏しに承る。御簾の内には涙もせきあへず、五月雨のしげき梢よりも、なほ潮垂れたる袖の上の涙、よそまでもあはれを催さぬ人もなし。^(注7)

さて、左近尉、よく承りて、殿下の御前に参りて申しけるは、「姫君の御誕には、『われ人間に生を受けて、五人の親を持ちたり。五人と申すは、まことの父、まことの母、養ひ父、養ひ母、また後の親とて五人持ちたり。まことの母と申すは大田の帝の二宮、白川の姫君、まことの父と申すは、当座にまします堀川の大納言殿にておはします。養ひ親と申すは明石の海士夫婦、

また、後の親と申すは継母（注11）、五人これなり。われ十三の年、筑紫へ御下りありし時、何の咎とがありけん、継母、明石の海へ沈められしを、使ひの者、情けある者にて沖の岩に捨てしを、五日と申すに、海士の漁あさりして戻りしが見つけて、海士の岩屋に四年ま

で住みしを、中將殿の伊予（注12）より御帰りのついでに、見出だされ参らせて、錦の袴（注13）さながらふるさと都へ帰りぬ。父大納言殿へか

くと申したく候ひしかども、わがいとほしさのまに、北の御方を恨みさせ給へば、継母の御氣（注15）を背くことなるべし。しかれば、

不孝ふけうの道に入りぬべし。多くの罪の中にも不孝にまさる罪はなし。されば、作る罪はなけれども、恐ろしきは母御前なり。され

ども、今日まで申さず、二人公達、いかに見れども目離（注14）れせず、類たぐひなく思ふに、わが父の、われ一人持ち給ひて、かき消すや

うに失ひて、いかに嘆き給ふらん。されば、公達二人、わが身ともに父の御見参（注15）に入らんがために、ただ今申し侍る（注16）と仰せら

る」と申せば、殿下をはじめ奉り、公卿、殿上人、子のあるも子のなきも同音に皆々泣き給ひけり。大納言殿も大床おほゆかに伏しこ

ろび給ひて、「夢かや夢かや、さら（注17）に現うつとは覚え（注18）ず」とて、直衣の袖をぞ絞り給ひける。さて、祝ひめでたくし給ひて、日も

暮れぬ。母屋もやの御簾しやうの前に御座敷のありけるに、大納言殿を請しやうじ参らせて、対の屋、御見参ありて、違ちがはぬ姫君なりけり。

（ウ）さてあるべきにあらねば、大納言殿、帰らせ給ひて、北の方、仰せらるるやう、「皆人は帰らせ給ひ候ふなるに、いかにや

遅く入らせ給ふぞ」と問はせ給へば、あまりに恐ろしく思おぼして、ややしばらくありて、「人にすぐれたる喜びありて」とのたま

へば、「まことに喜びするこそ道理なれ。わが姫君、御乳ちちに参りたれば、その故ぞかし」と仰せられけるこそをかしけれ。大納

言殿、しばらくありて、「何の咎とがの報いにて、対の屋の姫君を明石の海に沈められけるぞ。悪き者の親なれば、いかに憎しと思

しけん。凡夫（注17）こそ口惜しけれ」と仰せられ（注18）て、御車寄せられて、ふるさとへ送り給ひけり。

（注） 1 若君七つ、姫君五つ——「若君」「姫君」はいずれも対の屋の姫君の子どもたち。後の「公達」もこの若君と姫君をさす。

2 袴着——子どもが初めて袴を着用する儀式。「袴着の親」とは、袴の腰の紐ひもを結ぶ人のことで、その子の後見人になる。

3 ちさうやういんの刑部卿の宮——人名。

4 一の人の袴着——関白家の袴着の意。「二の人」は関白のことで、中將の父親。後の「祖父殿下」「殿下」も同じ。

- 5 堀川の大納言——後の「帥の大納言」「大納言」も同じ。

6 姫君——対の屋の姫君のこと。これ以後、単に「姫君」とある場合はすべて対の屋の姫君をさす。

7 茵——敷物。

8 冠の巾子を地につけて——深くひれ伏して。

9 「冠の巾子」は、冠の上部の束ねた髪を入れる部分。左近尉——中將の側近で、対の屋の姫君の世話をしている。

10 明石——現在の兵庫県南部の瀬戸内海沿岸の地名。

11 筑紫へ御下りありし——かつて堀川の大納言が家族を連れて筑紫に下ったことをさす。「筑紫」は現在の福岡県の大部分。

12 伊予——現在の愛媛県。

13 錦の袴しながら——「故郷へ錦を飾る」ということわざどおりに、の意。

14 北の御方——堀川の大納言の妻で、対の屋の姫君の継母。後の「母御前」「北の方」も同じ。

15 御氣——お気持ち。

16 わが姫君、御乳に参りたれば——「わが姫君」は、北の方の娘のことで、若君の母親が対の屋の姫君だとは知らないまま、若君の乳母になっている。

17 凡夫——愚かな人の意。堀川の大納言が自らのことを言っている。

18 ふるさと——継母の実家。
- 大田の帝——白川の姫君

堀川の大納言（帥の大納言・大納言）

継母（北の御方・母御前・北の方）

○

「若君の乳母」

姫君

対の屋の姫君（姫君・対の屋）

中將

閔白（一人・祖父殿下・殿下）

姫君

若君（公達・御兄妹）
- 30 -

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

。

(ア)

やがて参りて

21

- ① そつとうなずいて
- ② すぐに参上して
- ③ ひそかにお聞きして
- ④ 素直にお返事して
- ⑤ そのままお行きになつて

(イ)

さらに現とは覚えず

22

- ① あまり詳しくは覚えていない
- ② とても正気とは思えない
- ③ かえつて本当のことはわからない
- ④ まったく現実とは思われない
- ⑤ いっそう真実味が感じられない

(ウ)

さてあるべきにあらねば

23

- ① そうしていられるわけでもないので
- ② それはすばらしいことだったので
- ③ そのままでは台無しになるので
- ④ それ以上はがまんできないので
- ⑤ それではどうしようもないので

問
2

波線部 **a** と **c** の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

24

- | | | | | | | |
|---|----------|--------|----------|---------|----------|--------|
| ⑤ | a | 使役の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 受身の助動詞 |
| ④ | a | 使役の助動詞 | b | 動詞の活用語尾 | c | 尊敬の助動詞 |
| ③ | a | 尊敬の助動詞 | b | 動詞の活用語尾 | c | 尊敬の助動詞 |
| ② | a | 尊敬の助動詞 | b | 動詞の活用語尾 | c | 受身の助動詞 |
| ① | a | 尊敬の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 受身の助動詞 |

問3

傍線部A「公達は何とて帥の大納言をば礼し給ふぞ」とあるが、この問いに対し、対の屋の姫君はどう答えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

① 実は堀川の大納言が父であるが、自分が継母から受けたひどい仕打ちを父に話すと、継母が父に憎まれ、それは継母に対しての親不孝になるだろうと考えて黙っていたが、自らが子をもうけて我が子をいとしく思ううちに、自分を失った父の嘆きに思い至り、父に対面しようと決心した。

② 実は堀川の大納言が父であるが、自分が継母によって明石の海岸に置き去りにされたことを父に話すと、継母から仕返しをされるかもしれないので、恐ろしくてこれまで黙ってきたが、父は孫の顔を見たいに違いなく、この先父に会わないままではいられないと思った。

③ 実は堀川の大納言が父であるが、自分に同情することで、父までもが恐ろしい継母から恨まれるのではないかと心配でこれまで父に連絡をしてこなかったが、二人の子どもを育てるうちに父のことが恋しくなり、今に至るいきさつを話すことにした。

④ 実は堀川の大納言が父であるが、自分が父と会々と、継母が機嫌を損ねて父につらく当たることになるので、父に対して親不孝になるだろうと思ってこれまで父との連絡を絶ってきたが、子どもたちがどうしても祖父に会いたいと言うので、父に対面しようと決意した。

⑤ 実は堀川の大納言が父であるが、自分を海に沈めようとするような恐ろしい継母と関わりを持つことを避けて、みずからの存在をひたすら隠していたが、いとしい子どもの将来のことを思うと、父に真実をすべて話し継母から守ってもらうほうがよいと考えた。

問4

この文章を通して、堀川の大納言の気持ちはどのように移り変わっているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 最初は娘に丁重にもてなされたことをうれしく思ったが、中將の妻となつたいきさつを娘から聞くうちに、これまでの娘の苦勞を知つて涙がこらえきれなくなり、娘の命を奪おうとした妻を許せないと思った。
- ② 最初ははじめて孫と対面した喜びに深く感動したが、今日という晴れやかな日を迎えるまで娘と孫がどれほどつらい目にあつたかを知つて驚き、そのことを今まで知らずにいた自分を情けなく思った。
- ③ 最初は関白の孫たちから特別に挨拶あいさつを受けてただただ感激していたが、やがて、その子たちが実は自分の孫でもあり、祖父である自分に敬意を表してくれたのだと知り、妻ともどもこの日を迎えられたことを喜んだ。
- ④ 最初は関白の孫たちに挨拶されても事情がわからず恐縮したが、その母が長年行方知れずになっていた自分の娘であると知つて感激し、その娘を亡き者にしようとした妻への怒りがこみ上げてきた。
- ⑤ 最初は行方不明の娘を心配する気持ちでうちひしがれていたが、思いがけず関白家の宴席でその娘と対面して喜びにひたり、帰宅して妻にそのことを語つたものの、妻の態度が冷淡だったのでひどく落胆した。

問5 この文章の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27

。

- ① 対の屋の姫君の子どもたちは、言われたとおりきちんと堀川の大納言に挨拶できたことを、母に得意げに報告した。
- ② 中将の父親である関白は、対の屋の姫君が実は堀川の大納言の娘であることを、この日までずっと知らなかった。
- ③ 対の屋の姫君が御簾の内から泣きながら左近尉に説明する声を、人々は漏れ聞いてその身の上に同情した。
- ④ 中将は、堀川の大納言と子どもたちを引き合わせた後、婿として挨拶しようと、母屋で堀川の大納言を待っていた。
- ⑤ 継母は、堀川の大納言がなかなか戻ってこないのを、若君の乳母である自分の娘に何かあったのかと、不審に思った。

問6 この文章の構成と表現の特徴についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

28。

- ① 前半の、孫である幼い兄妹と対面して喜ぶ堀川の大納言の姿と、後半の、その話を聞いて苦々しく思う継母の姿が対比的に描かれている。
- ② 堀川の大納言が、娘である対の屋の姫君と劇的な再会を果たした場面の中に、娘を苦しめた妻に対する堀川の大納言の怒りの描写が散りばめられ、物語の展開に緊張感を与えている。
- ③ 対の屋の姫君の言葉に涙を流す周囲の人々の様子を、本文を通じて何度も描くことで、対の屋の姫君のそれまでの苦しみと、父堀川の大納言との再会の喜びが強調されている。
- ④ 儀式の場面で関白・対の屋の姫君・堀川の大納言・継母たちの心情を細やかに描き、複雑に入り組んだ人間関係の中の、それぞれの立場の違いを際立たせている。
- ⑤ 対の屋の姫君の真実が明らかになっていく場面は、儀式の様子や左近尉の報告などを通して詳しく叙述されているが、実際に父堀川の大納言と対面した場面は簡略に描かれている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）
（配点 50）

夫言有_二至微_一。然聴而繹_レ之_〇、可_レ為養心之助者、即当審記。

余官_二姑蘇_一、偶見_二白公集_一中、自謂_レ官_二吳_一数年、未_三嘗置_二太湖石_一

片_一。余曰、「白公喜_二水石_一、何乃遺_レ此。」張伯起答曰、「如_レ此累_レ心事、

白公不_レ做。」嗟嗟、世之可_レ以累心者、不_レ少矣。過而_レ不有_レ、心境自適_一。

寧_二独石_一哉。

又聞_二王元美鎮_一郎、曾薦_二一属吏_一。乃其郷人常_二冒_レ公者_一。或曰、「公

薦_二某人_一、是薦_二其_一冒_レ我者_一也。自此以往、凡求_レ薦者、争_二冒_レ公_一矣。薦而買_一

冒_二将母_一愚乎。」公笑曰、「不然。我不_レ薦_レ他、他更_二冒_レ我_一。」余聞_二此答_一

不^レ覺^エ胸^{（注9）}次^{（注9）}頓^{とみニ}開^キ、計^{けい}較^{かう}之^{（注10）}念^{（注10）}、一^ニ時^{（注10）}都^{すベテ}盡^{キタリ}。

嗟^{（注11）}嗟^{（注11）}、兩^{（注11）}君^{（注11）}子^{（注11）}者^{（注11）}、俱^{（注11）}吳^{（注11）}名^{（注11）}賢^{（注11）}也^{（注11）}。故^ニ服^{スルニ}伯^{（注11）}起^{（注11）}之^{（注11）}言^{（注11）}、命^{なづケテ}曰^ヒ「清^{（注11）}心^{（注11）}丸^{（注11）}子^{（注11）}」。

服^{スルニ}元^{（注12）}美^{（注12）}之^{（注12）}言^{（注12）}、命^{ケテ}曰^フ「寬^{（注12）}中^{（注12）}散^{（注12）}」。

（江盈科『雪濤閣集』による）

（注）1 姑蘇——地名。江蘇省蘇州市。吳地方の中心地。

2 白公集——中唐の詩人、白居易の詩文集。

3 太湖石——太湖から産出する石で、文人の収集の対象となった。

4 水石——水中から産出する石。

5 張伯起——人名。

6 王元美——人名。

7 鎮^レ郎——郎を治める。郎は地名。江蘇省如皋^{じよこう}県。

8 其^レ冒^レ我^レ者——ここでは、王元美を罵る者を指す。

9 胸次——胸中。

10 計較之念——あれこれ気にして思い悩む気持ち。

11 丸子——丸薬。錠剤。

12 散——散薬。粉薬。

問1

傍線部(1)

「偶」

・(2)

「俱」

の読みとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

29

・

30

。

(1)

29 「偶」

⑤ ④ ③ ② ①

たまたま
ますます
いよいよ
しばしば
そもそも

(2)

30 「俱」

⑤ ④ ③ ② ①

つひに
にはかに
つぶさに
ひそかに
ともに

問2

傍線部A「可為養心之助者、即当審記」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 可_レ為_ニ養_ニ心_一之助者、即当_ニ審_ニ記_一
心の助けを養ふを為すべき者は、即ち当に審らかに記すべし
- ② 可_レ為_ニ養_ニ心_一之助者、即当_ニ審_ニ記_一
心を養ふの助けと為すべき者は、即ち当に審らかに記せんとす
- ③ 可_レ為_ニ養_ニ心_一之助者、即当_ニ審_ニ記_一
心を養ふの助けと為すべき者は、即ち当に審らかに記すべし
- ④ 可_レ為_ニ養_ニ心_一之助者、即当_ニ審_ニ記_一
為すべきは心の助けを養ふ者なれば、即ち^あ当たりて審らかに記せ
- ⑤ 可_レ為_ニ養_ニ心_一之助者、即当_ニ審_ニ記_一
心の助けを養ふを為すべき者なれば、即ち審らかに記すに当たる

問3

傍線部B「官^レ呉数年、未^ミ嘗置^ニ太湖石一片^一」とあるが、白居易が太湖石を庭に置かなかった理由について張伯起はどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

- ① 日々地方官として忙しく働かねばならず、太湖石のことを気にかかるような余裕などなかったから。
- ② 水中にある石を集めることは好きだが、太湖石の形はまったく白居易の好みに合わなかったから。
- ③ 太湖石はこの地方ではきわめてありふれた石に過ぎず、どこへ行っても見ることができたから。
- ④ 一つでも太湖石を手に入れると、次から次へと太湖石を集めたくなり、それで心が乱されてしまうから。
- ⑤ 太湖石は非常に高価であり、太湖石を庭に置けば、清廉な役人という評判に傷がつく恐れがあったから。

問4 傍線部C「寧独石哉」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 33。

- ① 人の心を惑わせるものは石だけではないということ。
- ② 人の心を惑わせる石は太湖以外でも見つかるということ。
- ③ 石そのものが人の心を惑わせるわけではないということ。
- ④ 太湖石を題材にした詩は人の心を惑わせるということ。
- ⑤ 石以上に人の心を惑わせるものはないということ。

問5 傍線部D「薦而買_レ罾、将母_レ愚乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 34。

- ① 「某人」を推薦する一方で、別の人を罵_{ののし}るのは、やはり愚かなことなのだろうか。
- ② 「某人」を推薦したら、決してその人を罵らないことこそ、賢明というものだ。
- ③ 「某人」を推薦しておいて、後でその人を罵るのは、とても賢明とは言えない。
- ④ 「某人」を推薦した結果、他の人からも罵られるようになるのは、愚かなことだ。
- ⑤ 「某人」を推薦して、その後その人から罵られたとしても、愚かとは言えない。

問6 傍線部E「他」と同じ人物を指しているのは文中の波線部のaとeの語のうちのどれか。次の①～⑤のうちから一つ
選べ。解答番号は

35。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|----|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| e | d | c | b | a |
| 其郷人 | 王元美 | 張伯起 | 白公 | 余 |

問7

本文の内容と表現上の特色に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 張伯起の服用していた「清心丸子」という錠剤と王元美が服用していた「寛中散」という粉薬が、健康の維持だけでなく、欲望や怒りを鎮める精神安定剤として役立っていることを具体例を挙げて説明している。
- ② 張伯起の言葉は欲望を抑えるのに効用があり、王元美の言葉は心にゆとりを持つのに効用があるとして、賢人の言葉は自己の修養に役立つことを、「清心丸子」とか「寛中散」とかいう薬の名をつけて巧みに表現している。
- ③ 張伯起と王元美の二人を賢人として持ち上げたうえで、張伯起の言葉に「清心丸子」、王元美の言葉に「寛中散」とそれぞれ薬の名をつけて茶化し、二人が実は偽君子に過ぎないと皮肉を込めて表現している。
- ④ 張伯起が白居易から無心の境地を学び、王元美が自分の推薦した人物から寛容の精神を学んだことを、「清心丸子」や「寛中散」という秘伝の薬を与えられたという比喻を用いて述べ、二人の学ぶ姿勢を称賛している。
- ⑤ 張伯起には心にゆとりを持たせる錠剤に「清心丸子」という名を、王元美には欲望を抑える粉薬に「寛中散」という名をつけてもらったという逸話を示し、賢人の名声を利用して二つの薬の効能を印象づけようとしている。

